

● 2017年4月

- 2017/04/27 京都の米軍基地（107）：イースターで子供の米軍馴致
- 2017/04/26 キリスト教会，連続攻撃される
- 2017/04/25 中ネ共同軍事訓練の地政学的意味
- 2017/04/18 ネ中共同軍事訓練「サガルマータの友好 2017」
- 2017/04/17 咲き遅れるコブシ
- 2017/04/16 紹介：名和克郎「体制転換期ネパールにおける『包摂』の諸相」
- 2017/04/15 国語としてのネパール語の位置
- 2017/04/12 紹介：名和克郎（編）『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相』
- 2017/04/11 宝塚の桜
- 2017/04/10 習近平『中国の統治』ネパール語版の出版
- 2017/04/09 中国のネパール地方選支援，インドが懸念
- 2017/04/05 春爛漫の小旅行

京都の米軍基地(107)：イースターで子供の米軍馴致

今年もまた，京丹後進駐米軍がイースターを利用して子供たちを洗脳し，その成果をあっけらかんと世界に向け宣伝している。米国国益のためなら，アジア辺境地の「無邪気な子供たち」のプライバシーなど，はなから問題にならない。

「EASTER EGG HUNT」4月15日

(1)会場：京丹後文化会館 主催：米陸軍経ヶ岬通信所 共催：京丹後市国際交流協会

(2)会場：道の駅てんきてんき丹後 主催：米陸軍経ヶ岬通信所

招待されたのは、3歳から12歳までの子供たち。会場では、軍人、軍属ら米軍関係者が、おやつ付きで楽しく遊んでくれる。こんなことを繰り返せば、子供たちはごく自然に米軍に馴れ親しんでいく。そして、数年、おそくとも十数年もすれば、彼らは親米軍の日本国権者となるわけだ。

一般に英米は、総合的な長期戦略に長けている。京丹後での米軍馴致作戦も、その典型だ。一見迂遠に見えるが、結局はそれが、米国防衛のための日本国土利用を、より安定的・効率的とし、そしてまた、より安上がりとするのだ。

さらにもう一つ注意すべきは、イースター(復活祭)は宗教儀式でもあるということ。ももとの起源は定かではないが、一般にイースターは「イエス・キリスト復活記念日」とされ、世界各地のキリスト教会で特別なイースター礼拝が執り行われている。

「EASTER EGG HUNT」は、そのキリスト教儀式としてのイースターを祝う祭事。それを米軍と京丹後市国際交流協会が共同で開催し、そこに地域の子供たちを招く。京丹後市国際交流協会には京丹後市から「運営補助金」や「事業補助金」が出されているから(今年度補助金額不明)、「EASTER EGG HUNT」は直接的あるいは間接的に公金補助を受けていることになる。

このように、米軍と京丹後市は、基地運用開始からわずか2年余にして、はやズブズブの関係、市役所は米軍奉仕にこれ努めている。日本は、わざわざミサイルなどぶち込まなくても、こうして半植民地化できる。安上がり。感謝されさえする。もって範とすべし。



■ゲームとお菓子と英語と米軍(宣伝ポスター)／京丹後市国際交流協会 FB(子供の顔消去)

谷川昌幸(C)

2017/04/27 at 19:42

カテゴリー: [軍事](#), [平和](#)

Tagged with [イースター](#), [米軍基地](#), [経ヶ岬](#), [肖像権](#), [政教分離](#), [京丹後](#)

キリスト教会、連続攻撃される

ネパールのキリスト教会が、2回連続して攻撃された。いずれも犯人は不明。

4月16日午後、「ネパール全国キリスト教連合(FNCN)」のサントシュ・カドカ書記が、ラリトプル・マンバワンの FNCN 集会所開催のイースター集会に参加し、帰宅しようと会場を出て 100m ほど行ったところで、何者かに銃で腰付近を撃たれ重傷を負った。FNCN はプロテスタント教会の統括団体。

その2日後の4月18日午前3時ころ、今度はラリトプル・ドビガートの被昇天教会(Assumption Church)が、何者かの集団に放火された。教会西入口付近と聖職者住居の一部が焼け、バイク2台と車1台が全焼した。この被昇天教会は、ネパール最大のカトリック教会で、2009年には礼拝中を爆破され、3人が死亡している(*3,*4)。

今回狙われたのはプロテスタントとカトリックであり、犯人も具体的な攻撃目的も不明だが、宗派にかかわらずキリスト教そのものが攻撃目標にされたとみるべきであろう。5月中旬の地方選との関係は、不明。



■被昇天教会／放火された住居と車輛(同教会 FB)

*1 “Christian Federation concerns shooting of its member,” Kathmandu Post, 19 Apr 2017

*2 “Arson attack at the Catholic Church just after office secretary of Christian federation was shot,” nepalchurch.com, 20 apr 2017

*3 [コミュニティの予兆\(5\)](#)

*4 [コミュニティの予兆\(6\)](#)

谷川昌幸(C)

2017/04/26 at 12:21

カテゴリー: [宗教](#)

Tagged with [カトリック](#), [キリスト教](#), [プロテスタント](#)

中ネ共同軍事訓練の地政学的意味

ネパール国軍と中国人民解放軍が、カトマンズの「パラ軍学校」において、初の共同軍事訓練「サガルマータの友好2017」(4月16～25日)を実施している。これは、ネパールをインド勢力圏内の一小国とする伝統的な見方からすると、驚くべき新たな事態とみてよいであろう。(参照: [中ネ共同軍事訓練「サガルマータの友好2017」](#))

そのことを中国政府側から明快に分析し、その意義を高く評価しているのが、『環球時報』のこの記事:

▼Liu Zongyi, "Indian Worry Over China–Nepal Drill Outdated," Global Times, 21 Apr 2017

著者の Liu Zongyi 氏は上海国際問題研究院の上席研究員。以下、この記事の概要を紹介する。

「サガルマータの友好 2017」は、テロ対策と災害救助を目的とする中国とネパールの共同軍事訓練である。ネパールは、中国と緊密な経済関係を持つに至り、「一帯一路」への参加も希望している。それには、テロ対策を進め、「この地域の安全と安定」を図ることが不可欠だ。また、ネパールは地震など災害多発国であり、災害救助訓練も必要だ。

この共同軍事訓練は、こうした目的を持つものであり、当初、大隊規模での実施を予定していたが、インドの対ネ圧力により、「パラ軍学校」での小規模な訓練となってしまった。が、たとえそうであっても、この共同訓練には大きな意義がある。

インドはこれまで、冷戦的な地政学的観点から、ネパールやブータンを「自国の勢力圏内」におき、「中国との間の緩衝地帯」として利用してきた。そして、ナショナリズムが高揚し、モディ首相が就任すると、インドは「対中強硬策」をとり、「中国が南アジアやインド洋沿いの国々と経済協力を進めることを警戒し、中国の影響力を押し返そうとしてきた」。

ネパールは、そのようなインドに「政治的、経済的、文化的など様々な面で依存してきた」。そのため「ネパール人の多くが、シッキムのように、自分たちも国家としての独立を失うのではないかと恐れてきた」。

そのネパールにとって、「この共同軍事訓練は、中ネ二国間関係が政治的・経済的・文化的なものから、軍事的防衛の領域にまで拡大したこと」、あるいは「ネパールが大国間バランス外交に向け前進したこと」を意味する。さらにまた、「中国との共同軍事訓練は、ネパール国内の民族的分離主義を抑止することにも役立つ」。

「中国は、中国-ネパール-インドの三国間関係につき、明確な立場をとっている。中国は、ネパールが中国とインドの架け橋となることを願っている。中国-ネパール-インド経済回廊を前進させることにより、これら三国すべての発展を加速できる。インドが中国とネパールの協力をどう見るにせよ、中国とネパールとの協力は、両国民の利益となるものであり、拡大し続けるであろう。」

以上が、Liu Zongyi 上席研究員の『環球時報』掲載記事の要旨。中ネ共同軍事訓練をバックに唱えられているにせよ、議論それ自体は、まったくもって正論である。ネパールが独立を堅持し、もって中印の架け橋になるとは、ネパール政府が以前から繰り返し唱えてきたネパール外交の表向きの基本方針だし、中ネ印の平和的経済発展にも反対のしようがない。

たしかに、新たな「正義と平和」は、新たな強者の側にある。ネパールは、昇竜・中国に導かれ、インドの勢力圏から脱出し、相対的により独立した「中印のバランス」ないし「中印の架け橋」へと向かうのであろうか？



■ネ中共同軍事訓練(国軍 HP)／一帯一路(Xinhua Finance Agency HP)

谷川昌幸(C)

2017/04/25 at 19:10

カテゴリー: [インド](#), [ネパール](#), [経済](#), [軍事](#), [外交](#), [中国](#)

Tagged with [地政学](#), [一帯一路](#)

ネ中共同軍事訓練「サガルマータの友好 2017」

ネパール国軍と中国人民解放軍が、国軍パラ訓練校(マハラジガンジ)において、初の共同軍事訓練「サガルマータの友好 2017」作戦を開始した。4月16～25日実施の予定。

ネパールは、軍事的には、これまでインドや英米との関係が深かった。ところが最近、中国が急接近、資金的にも教育訓練でも中国援助が急増している。その結果、ネパール国軍の中に、有力な親中派が形成され始めたという。

中国は2002年、バングラディシュと防衛協力協定を締結し、武器も供給し始めた。そのような関係を、ネパールやスリランカとも構築したいと中国は考えているという。そうなれば、パキстанはすでに軍事的に中国と密接な関係にあるので、インドを封じ込めつつ「一帯一路(OBOR)」を実現するという中国の野望は、大きく前進することになるであろう。

【参照】

- ・2008年:中国,ネパール国軍に対し260万ドルの援助約束。
 - ・2011年:中国,ネパール国軍に対し777万ドルの援助約束。
 - ・2013年6月:中国,武装警察隊訓練校開設のため36億ルピー援助表明。
 - ・2017年3月:対ネ投資会議において,中国が83億ドル(ネパールGDPの40%相当)のインフラ投資表明。
 - ・2017年3月23-25日:中国国防大臣ら軍関係幹部がスリランカ訪問を終え,訪ネ。大統領,首相,国防大臣らと会談。共同軍事訓練について協議。中国側,ネパール国軍に対し3千2百万ドル援助を表明。
 - ・2017年3月27日:中国,訪中したプラチャンダ首相に5月地方選援助(1億3千6百万ルピー)を表明。
 - ・2017年4月16~25日:ネパール・中国共同軍事訓練「サガルマータの友好2017」
- *1 “Nepal-China Joint Military Training Commences,” Nepalese Army HP (n.d.)
- *2 “10-day Nepal, China joint army drill starts today,” Kathmandu Post, Apr 16, 2017
- *3 Anil Giri, “Nepal-China joint military drill begins,” Hindustan Times, Apr 16, 2017

*4 Nihar R Nayak, "China's growing military ties with Nepal," The Institute for Defence Studies and Analyses HP, March 31, 2017



■ネ中共同軍事訓練(国軍 HP)

谷川昌幸(C)

2017/04/18 at 18:14

カテゴリー: [インド](#), [ネパール](#), [軍事](#), [中国](#)

Tagged with [地政学](#), [一帯一路](#)

咲き遅れるコブシ

コブシは早春の花。丹後では、他の木々の芽吹きの前に、いち早く純白の花を一気に開く。この鉄橋の向こうのコブシも、私の生まれるはるか、はるか昔から、そのようにして喜ばしい春の訪れを村人に告げてきた。ところが今年は、他の木々はすでに芽吹き始め、桜も終わってしまったのに、まだ咲いている。春の訪れでないとする、なにを私たちに告げたいのだろうか？



谷川昌幸(C)

2017/04/17 at 16:13

カテゴリー: [自然](#)

Tagged with [環境](#), [温暖化](#)

紹介:名和克郎「体制転換期ネパールにおける『包摂』の諸相」

これは、名和(編)『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相』(三元社、2017年)の序章(p1-43)。ネパールにおける「包摂」の問題が簡潔に整理されている。以下、興味深く読んだ部分を中心に、紹介する。

「包摂(サマーベシーカラン)」は、英語 inclusion の訳語として 21 世紀に入ってから普及した新語だが、2006 年以降、「『包摂』概念と全く無縁でいることは、ほぼ不可能」となった(p4-5)。

「包摂」は、パンチャーヤット時代の「統合」とは決定的に異なり、「多様な人々を、その多様性を消し去ることなく、その一員とすることを含意」し、紛争後のネパールでは「表立って反対することの困難な、プラスの価値を帯びることとなった」(p14)。

一方、「包摂」は、「包摂される単位の明確な設定を要請する」。それは、包摂を要求する周縁的な諸集団から、それらに対抗しようとする伝統的上位身分の人々にまで及んでいる(p14-15)。

しかし、「注意すべきは、王制廃止後、国の統一的シンボルの欠如が指摘される状況にあっても、ネパールにおける『包摂』を要求する議論において、ネパールという枠組み自体が疑われることは極めて少ないということである。『包摂』は『包摂』される対象の存在を前提とするのであり、『過度の包摂への取り組みがネパールの統一性を損ない、国家を分裂させる』と主張するのは、ほぼ常に、自らを主流社会の側に位置づける人間である」(p18)。

以上が、「序章」の中で特に興味深く思われた部分の私なりの要約である。この部分を読んだだけでも、「包摂」をめぐる問題状況が、よくわかる。

ただ、私としては、ここでは直接触れられていないが、「包摂」を実現する制度の問題が気になる。包摂する際、社会諸集団の「自治」を制度的にどこまで認めるか？ 連邦制との関連でしばしば要求されているように、もし「自決権」や「分離権」まで認めるなら、そうした形での包摂への取り組みが「国家を分裂させる」恐れは十分にあるとみてよいのではないだろうか？



■NEFIN・HP より

谷川昌幸(C)

2017/04/16 at 21:25

カテゴリ: [ネパール](#), [民族](#)

Tagged with [包摂](#)

国語としてのネパール語の位置

カナクマニ・デグジット氏が、「ネパール語の位置(ネパール語の役割)」と題した興味深い記事を『ネパリ・タイムズ』(4月7-13日号)に書いている。専門外の私には少々わかりにくい文章だが、論旨はおおよそ次のようなことだろう。(厳密には原文をご覧ください。)

ネパール語は、ネパールの国語(国家語・国民語)であり、ネパールの人々の便利な共通語(リンガフランカ)だが、その反面、それがネパールで用いられてきた他の多くの言語の衰退を招いたこともまた事実である。

歴史的にみて、ネワール語かマイティリ語あるいはヒンディ語にもチャンスはあったが、結局、国家統一した「カス」の人々の言語たるネパール語がネパールの国語・共通語になった。

特に1960年代以降、カトマンズの中央権力が国家統治のためネパール語を国語として普及させていった。また、知識人らも、ネパール語を多様な人々の住むネパール社会に適するように発展させていった。

ネパール語普及には、ゴルカ兵も大きく寄与した。ゴルカ兵は任地でネパール語を共通語として使用して習熟し、退役帰国後は、ネパール語訳『ラーマーヤナ』を持ち帰るなどして、非ネパール語地域にネパール語を広めた。

さらにもう一つ、ネパール語それ自体がきわめてダイナミックな言語だったことも、その普及に大きく寄与した。ネパール語は、複雑な思考や感情を簡潔な文章で表現できるし、擬音語(オノマトペ)も豊富だ。ネパール語は、この優れたダイナミズムにより、ネパールの他の言語とも結びつき、ネパールの国語・共通語となることができたのだ。

その結果、ネパールには、他の南アジア諸国に見られるような、英語対自国語といった言語対立・言語格差(English vs. Vernacular divide)はない。その反面、国語としてのネパール語を持つがため、外部世界との関係では島国的となるきらいがあり、今後、それが問題となるであろう。

以上がカナクマニ・デグジト氏の記事のおおよその論旨だとすると、彼はかなりのネパール語ナショナリストと見てよいであろう。しかし、国語としてのネパール語のおかげで、少なくともネパール国内には英語使用者と非使用者の間の言語に起因する深刻な対立や格差はないというのは、事実であろうか？ とても、そのようには思えないのだが。



■様々なネパール語辞典。三枝編著『ネパール語辞典』はネパール国内書店販売のペーパーバック版。

谷川昌幸(C)

2017/04/15 at 15:26

カテゴリー: [言語](#), [文化](#)

Tagged with [ネパール語](#), [英語](#), [国語](#), [母語](#)

紹介: 名和克郎(編)『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相』

編者によれば、本書は、立憲王国から連邦民主共和国への体制転換期(2006~2016年)のネパールの社会動態を、「包摂(サマーベシカラン, inclusion)」を鍵概念として多角的に分析したもの。全体の構成は、以下のようになっている。

●名和克郎(編)『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相 言説政治・社会实践・生活世界』三元社, 2017年3月17日刊, 592頁, 6,300円

▼帯の内容紹介

「多民族・多言語・多宗教・多文化性を前提とした連邦民主共和制に向けた転換期のネパールを生きる人びとの歩み、その主張と実践がおりなす布置を「包摂」を梃子に明らかにすると同時に、「包摂」をめぐる現象を民族誌的状況(生活世界)の中に位置付け、「統合」から「包摂」へと転換した「民主化」のいまを描きだす。」

▼目次

序章 体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相——言説政治・社会实践・生活世界／名和克郎

第1章 近現代ネパールにおける国家による人々の範疇化とその論理の変遷／名和克郎

第2章 ネパールの「カースト／民族」人口と「母語」人口——国勢調査と時代／石井博

第3章 国家的変動への下からの接続——カドギのカースト表象の展開から／中川加奈子

第4章 ガンダルバをめぐる排除／包摂——楽師カースト・ガイネから出稼ぎ者ラフレヘ／森本泉

第5章 ネパール先住民チェパン社会における「実利的民主化」と新たな分断——包摂型開発、キリスト教入信、商店経営参入の経験／橋健一

第6章 何に包摂されるのか？——ポスト紛争期のネパールにおけるマデンとタルーの民族自治要求運動をめぐる／藤倉達郎

第7章 そこに「女」はいたか——ネパール民主化の道程の一断面／佐藤齊華

第8章 テーマ・コミュニティにおける「排除」の経験と「包摂」への取り組み——人身売買サバイバーの当事者団体を事例に／田中雅子

第9章 ストリート・チルドレンの「包摂」とローカルな実践——ネパール、カトマンドウの事例から／高田洋平

第10章 乱立する統括団体と非／合理的な参与——ネパールのプロテスタントの間で観察された団結に向けた取り組み／丹羽充

第11章 「包摂」の政治とチベット仏教の資源性——ヒマラヤ仏教徒の文化実践と社会運動をめぐる／別所裕介

第12章 移住労働が内包する社会的包摂／南真木人

第13章 多重市民権をめぐる交渉と市民権の再構成——在外ネパール人協会の「ネパール市民権の継続」運動／上杉妙子

第14章 現代ブータンのデモクラシーにみる宗教と王権——一元的なアイデンティティへの排他的な帰属へ向けて／宮本万里

名和克郎
=編

体制転換期 ネパールにおける 「包摂」の諸相



谷川昌幸(C)

2017/04/12 at 10:42

カテゴリ: [ネパール](#), [民族](#)

Tagged with [包摂](#)

宝塚の桜

宝塚の桜は、4月9～10日が満開。あいにくの小雨，曇天だったが，電力補助自転車(*1)で，ちょっと回り道し見てきた。

最も風情があるのは，山麓古道沿いの古木並木の桜。宣伝されないので近所の人しか来ないが，実に美事。花見客に見られ囃され誉めそやされることなく，それでも古道を包み隠さんばかりに咲き盛る桜は，この上なく華やかで，そして切ない。生のはかなさ，死の予感さえ抱かせる。たしかに日本人好み。死の美化にさんざん利用されてきたのも，もつともだ。

これと対照的なのが，宝塚歌劇場付近の桜。美しくはあるが，古道沿いの桜のような切なさ，哀愁は感じさせない。観光用の見世物であり，だから写真にとっても，魂を抜かれたり，崇られたりすることはない。

▼宝塚歌劇場付近の桜



(*1) 蓄電池使用の電力補助自転車は優れもの。急坂でも難なく登れる。ただブレーキ制動力が弱く、速度を出すと危険。賠償保険加入を義務付けるべきだ。性能向上は革命的であり、電力補助 98%といった高性能自転車も出るだろうが、これは自転車？

谷川昌幸(C)

2017/04/11 at 10:07

カテゴリー: [文化](#), [歴史](#)

Tagged with [宝塚](#), [桜](#)

習近平『中国の統治』ネパール語版の出版

昨年末のことだが、習近平主席の『中国の統治』ネパール語版が出版され、ネパール大統領公邸で盛大な出版披露会が挙行された。



■ネパール語版披露(在ネ中国大使館 HP)

『中国の統治』原本は、2014年10月(9月?)発行。習主席の2012年11月～2014年6月の演説、談話、覚書、書簡など79編を収録しており、5百頁余の大作。中国語(簡体字版・繁体字版)、英語、仏語、独語、露語、アラビア語、スペイン語、ポルトガル語、クメール語、タイ語(2017年4月7日)、日本語の各言語版があり、5百万部以上発行された。2017年3月25日現在、1千7百万部突破。大国の大作の世界大ベストセラーだ。

ネパール語版は、「中国研究センター」が担当した。在ネ中国大使館、中国情報部、中国外国語出版局など中国側も全面的に協力し、1年かけて慎重に翻訳し、2016年12月出版にこぎつけたのである。

ネパール語版『中国の統治』の出版は、ネパール大統領公邸で、BD・バンダリ大統領と刘奇葆中国共産党政治局委員によりにぎにぎしく披露された。その席で、バンダリ大統領はこう述べた。

▼**バンダリ大統領**：「この本は、中国の統治制度や中国指導部のビジョンについて述べており、われわれの世界理解を深めてくれる。」中国は信頼する友であり、ネパールの発展を支援してくれている(*1)。

また、翻訳出版した「中国研究センター」のマダン・レグミ所長も、出版の意義を高く評価している。

▼**マダン・レグミ所長**：「この本は、ネパールの人々、とりわけ政策担当者にとって、今日の中国を正しく理解し学ぶための完璧な手引きである。ここには中国の理念、統治と法の支配の方法、そして国の将来設計が明確に述べられており、われわれのような近隣諸国にとっては大いに勇気づけられる本である。」ネパールの指導者らは、中国の発展と改革から学ぶべきである(*1)。

ネパール語版『中国の統治』は、出版されるとすぐ500部が売れたという。すごい！これほど売れるのなら、『美しい国へ』のネパール語訳出版も考えてみてよいのではないかと？日本には著者の意を忖度できる愛国的翻訳者・出版者はいないのだろうか。(参照：[安倍首相の怪著「美しい国へ」](#))



■カンボジア副首相出版披露(新華社 2015年2月22日)／タイ語版出版(新華社 2017年4月8日)

*1 “Nepali edition of Xi’s book on governance launched in Nepal,” Xinhua, 19 Dec. 2016

2017/04/10 at 17:17

カテゴリー: [ネパール](#), [外交](#), [中国](#)

Tagged with [習近平](#)

中国のネパール地方選支援, インドが懸念

インドが、中国によるネパール地方選支援を警戒している。(参照: [ネパール地方選を中国援助](#))たとえば、インドのフリー・ジャーナリストのジヌーク・チョウダリーは、「ネパール地方選を中国はなぜ支援するのか」(*1)において、次のように述べている。

中国は、プラチャンダ首相の訪中の際、ネパール地方選への百万ドルの支援を表明したが、これは「ネパールの紛争を煽るもの」だ。なぜ中国は、あえて選挙支援に踏み切ったのか？ それは、「一带一路(OBOR)」推進を図る中国にとって、ネパールがますます重要となってきたからだ。中国は、カトマンズ環状道路(第二期工事)、ポカラ国際空港、仏陀国際空港、セティ水力発電所などの建設に意欲を見せている。中国は、こうした事業を進めるため、ネパールの政策決定への影響力を確保しようと考えており、今回の地方選支援もその一環にほかならない。

チョーダリーは、1年前の別の記事「中国インフラのインド国境付近での拡充」(*2)においても、中国は「国境地域の防衛戦略強化のため、ネパール、パキスタンなどの近隣諸国を利用している」と、インドの安全保障の観点から警鐘を鳴らしている。

このように、ネパールへの中国の影響力の拡大は経済的にも政治的にも座視しえないというインド側からの議論が、このところ目に付くようになってきた。



■一带一路(Xinhua Finance Agency HP より)

*1 Jhinuk Chowdhury, "Here's why China is financing local elections in Nepal," Hindustan Times, Apr 03, 2017

*2 Jhinuk Chowdhury, "Expanding Chinese Infrastructure on the Indian Border," Live Encounters, May 2016

*3 Kallol Bhattacharjee, "China to fund local elections in Nepal," The Hindu, March 30, 2017

*4 “China Promises USD 1 Million For Nepal Polls During Xi-Prachanda Meet,” News 18, March 27, 2017

谷川昌幸(C)

2017/04/09 at 19:44

カテゴリー: [インド](#), [ネパール](#), [経済](#), [選挙](#), [中国](#)

Tagged with [One Belt One Road](#), [地方選挙](#), [一帯一路](#)

春爛漫の小旅行

久しぶりに上京し、大塚の「ネパリダイニング・ダルバート」で正調ネパール料理をいただきながら、ネパール関係の友人と楽しく歓談した。翌日は、快晴の桜に誘われ、今や戦後復興の象徴ともなっている「東京タワー」や、明治・大正期に日本各地の建築物が移築され多くが重文指定されている横浜三溪園を見物した。そして、帰途、湯河原から忍野八海にまで足を伸ばし、霊峰富士をふもとから遥拝してきた。春爛漫、楽しい小旅行であった。



ネパリダイニング
ダルバート
nepali dining
Dalbhat



■「ダルバート」(4月2日)



■東京タワー(増上寺 4月3日)／三溪園(4月3日)



■富士山(三国峠 4月4日)



■富士山(401号線駿河台 4月4日)



■富士山(忍野八海 4月4日)

谷川昌幸(C)

2017/04/05 at 20:32

カテゴリー: [自然](#), [文化](#), [旅行](#)

Tagged with [富士山](#), [忍野八景](#), [東京タワー](#), [三溪園](#)